

---

---

## 〈論 文〉

# 中世スコットランドのピクト王国からアルバ王国の成立と ヴァイキングとの戦い

## Kingdom of Pictland to the Unified Kingdom of Alba and its Battle with Vikings in the Medieval Scotland

久保田 義 弘

---

### 要旨と目次

本稿では、9世紀から10世紀にかけてのスコットランドがピクト王国からアルバ王国への発展・移行したこと、ならびに、その同時期におけるその周辺国の事情を概観する。特に、ピクト王国が後世になって“Viking”と呼ばれている人々（民族）の侵攻に対峙し、その戦いの結果、スコットランドの統一王国であるアルバ王国が形成された。また、ヴァイキングとの戦いから、スコットランドと同時に、イングランドにおいては、ウェセックス王国がイングランド全体を治めるようになり、イングランド統一王国が形成された。さらに、周辺国の事情では、特に、ヴァイキングとアイルランド王（上王：high king）との敵対、あるいは、両者の共闘を通じて、ヴァイキングの果たした歴史的役割の一端を考察する。

本稿は、3節から構成され、第1節では、ピクト王国からアルバ王国への移行期となる9世紀中旬から9世紀末までの時代を概観する。その時代は、スコットランド王のケニス1世からドナルド2世までの治世に対応する。第2節では、スコットランド王のコンスタンティン2世の治世とその周辺国の事情を概観する。同時に、特に、アイルランド王国の上王とヴァイキングの対立あるいは共闘についても概観する。第3節では、資料を通して、ピクト王国からアルバ王国に移行する時代は、コンスタンティン2世の治世に対応していることを概観し、併せて、それを検証する。

**キーワード：**アルバ王国、ケニス1世、コンスタンティン2世、ヴァイキング、イー・イ  
ヴァール王朝

### はじめに

本稿では、9世紀から10世紀にかけてのスコットランドならびにその周辺国の事情を概観する。特に、この時期には、スカンジナビア人は、“Foreigners”、“the Norse”、“the Norsemen”、あるいは“the Northmen”と呼ばれ、後世になって、“Viking”と呼ばれた人々（民族）が

スコットランド、アイルランド、ならびに、イングランドの海岸および内陸に進攻・侵攻してきたことに対し、スコットランドやアイルランドやイングランドの各王国は、時には、ヴァイキングと敵対し、時には、それと共闘した。その結果、スコットランドの統一王国（アルバ王国）やウェセックスによるイングランドの統一王国が成立したといえるかもしれない。そのアルバ王国は、ピクト王国によって培われたピクトの文化と伝統と、ダル・リアダ王国のゲール文化の伝統の融合の上に築かれた王国であった、と推測される。この王国の創設者は、ケニス 1 世 (Cináed mac Ailpin あるいは Kenneth MacAlpin あるいは Kenneth I) (在位 843 年? -858 年) であったと思われるが、その確立者は、コンスタンティン 2 世 (Constantine II, あるいは, Constantín mac Áeda) (在位 900 年-943 年?) であった。また、ヴァイキングとアイルランド王との戦いから、ヴァイキングの果たした効果や影響についても考察する。

### 第 1 節 ピクト王国の状況：ケニス 1 世からドナルド 2 世まで

キナエズ・マック・アルピンあるいはケニス・マックアルピン (Cináed mac Ailpin), あるいは、ケニス 1 世 (Kenneth MacAlpin, あるいは, Kenneth I) (在位 843 年? -858 年) は、ピクト王国の征服者であり、アルバ王国の創始者である言われている。しかし、彼がアルバ王国の創設者になったのは、彼の死後、150 年程経過した後のケニス 2 世の時代であった。

ケニス 1 世の支配体制は、それ以前のスコットランド王家が終焉したために実現したと考えられる。フォトリウ (ピクト) を 15 年間程の間支配していたオエングス 2 世 (Óengus II) (在位 820 年? -834 年) の息子ウエンあるいはエオガン (Uuen あるいは Wen あるいは Eóganann mac Óengusa) (在位 837 年-839 年), その弟 Bran (コンスタンティン王の甥), ダル・リアダ王国の王ボアンタの息子アイダ (Áed mac Boanta)<sup>1</sup> (在位 835 年-839 年), および、他の数え切れない人々が死んだ後に、ケニス 1 世が権力を握り、ピクト王国を治めたと思われる。それらの人々は、839 年、ヴァイキングとの戦いで死んだ<sup>2</sup>と考えられる。もし『Chronicle of the kings of Alba』の記述が正しいければ、その多くの人々の死後、4 人以上の王候補者の間で、その最高の権力を巡って争いが起こったことになる。フラズあるいはフェラト (Urad, あるいは, Ferat, あるいは, Uuerat son of Bargoit) (在位 839 年-842 年), フラズの息子であったブリディ 6 世 (Bridei VI) (在位 842 年), キニオズ 2 世 (Ciniod II) (在位 842 年), およびズレスト 10 世 (Drest X) (在位 845 年-848 年), そしてブリディ 7 世 (Bridei VII) (在位 842 年-845 年) とアルピンの息子キナエズの 4 人によって、最高権力を巡った争

---

<sup>1</sup> この Aed mac Boanta 王の後には、いかなるいかなる王の名も知られていない。ダル・リアダ王国は、ヴァイキングの侵攻で滅ばされたと理解される。

<sup>2</sup> このことは、『Annals of Ulster』に記録されている。

いが行われ、その争いの中でアルピンの息子キナエズ（ケニス1世）が勝利して、新しい統治者になった。

『Chronicle of the kings of Alba（アルバ王の年代記）』では、ケニス1世の治世の最初の年を845年としている。この年代記では、“So Kinadius son of Alpinn, first of the scots, ruled Pictland prosperously for 16years, Pictland was named after the Picts, whom, as we have said, Kenneth destroyed: for God designed to make them alien from, and void of, their heritage, by reason of their wickedness;”とある。ここでは、ケニス1世は、16年間、ピクトを治め、彼のピクト支配は、神の導きであると記されている。これは、彼によるピクト支配を正当化する記述である。さらに、ピクトを支配する2年前にケニス1世は、ダル・リアダ王国を手に入れていたと報告されているが、しかし、これは、一般には受け入れられていない。また、彼の治世の7年目(849年頃)には、聖コルンバの遺骨をアイオナから彼の建てたダンケルトの教会に移したと報告され、これは、現在、Monymusk Reliquary（聖遺物箱）として知られているものである。しかし、『Chronicon Scotorum』によると、これをアイオナからダンケルトに移送したのは、コンスタンティン(Constantín mac Fergusa)（在位789年-820年）であると記録している。この説では、その移送は818年となる。その年代記によると、ヴァイキングによるスコットランドの略奪を避けるために、コンスタンティン王の治世下の818年に聖コルンバの聖遺物箱がアイオナからダンケルトに移送されたと考えられる。

『Chronicle of the kings of Alba』によると、ケニス1世は、イングランドを6度にわたって侵攻し、ダンバー(Dunbar)とメルローズ(Melrose)を略奪し、それを焼いている。しかし、他方では、ブリトン人は、ダンブレイン(Dunblane)を焼き、そしてデーン人(ヴァイキング)は、ピクト王国を侵略し、ダンケルト、および、クルニー(Clunie)<sup>3</sup>にまで及んでいたと思われる。これは、ヴァイキングがピクト王国の南部深くまで侵攻したことを意味している。ケニス1世は、彼の治世16年目の2月13日にフォーティヴィオット(Forteviot)の王宮で死亡した。ケニス1世は、ヴァイキングを征服してはいなかったと思われる。

資料からでは、ケニス1世と彼の前のオエンガス1世の王朝との関係は、不明である。実際に、ケニス1世がオエンガス王朝と血縁関係にあったという記述は残っていない。だが、彼がオエンガス王朝の家臣であった可能性は否定できない。『Annals of Ulster』によると、839年にヴァイキングとフォトリウ(Fortriu)との戦いでピクト王国のウェン王および有力な多くのピクトの人々が死んだと報告されている。839年のヴァイキングの侵攻で主な王家の

<sup>3</sup> ストラスモアアーの近くで、パースシャーにある小さな村である。この村の近くに、ケニス1世によって近くの王室のクルンニーの森での狩猟のために使用された城であったと思われる基礎がある。

人々と、主だった家臣が殺害された、と思われる<sup>4</sup>。その後、その王家の遠縁の人々か、あるいは、他のピクト人の王家が台頭したのではないと思われる。その中にケネス1世の家系も含まれていたと思われる。

ケネス1世の治世のもう一つの特徴は、周辺国との関係が変化したことである。ピクト王国とアイルランドの関係は弱くなり、また、イングランドと大陸（フランク王国）との関係も崩れた。この中で、スコットランドの西あるいは北西に位置した、シェトランド、オークニー、ケイネス、サザーランド、西島嶼部、およびマン島においての定住者が増加した。この中でピクトとゲールの連合が強化された。一つの王国の形成に向けてスコットランドの統合が進められた、と考えられる。

彼の後継者は、アルピンの息子ドムナルあるいはドナルド・マックアルピン(Domnall mac Ailpín あるいは Donald MacAilpín) (在位 858 年-862 年) (812 年生-862 年没) で、ケネス1世の兄弟であった。『Chronicle of the kings of Alba』には、“In his time the Gaels with their king at Forteviot made the laws of the kingdom Edi (Áed) of son Ecdach.” とある。この法 (the laws) が具体的に何を示すのかは不明で、何を意味するのかよく分からない。これは、多分、ダル・リアダ王アイダ・フィン (Áed Find) (在位 768 年以前?-778 年) がケネス・マックアルピンとドナルド・マックアルピンの曾祖父であるという前提で記述されている。この報告で重要なのは、ケネス1世が死亡した Forteviot (フォーティヴィオット) でアルピン王家の支配が行われたことである。その地をアルピン王家の中核地域 (ハートランド; heartland) であることをこの一文は示しているのであろう。だが、彼の事績については、彼の死以外には知られていない。『Chronicle of Melrose』では、彼は、スクーン (Scone) で殺害された、と報告されている。他の資料では、彼の死を暴力によるものである、とは報告されていない。例えば、『Prophecy of Berchán』では、病死したと報告され、『Chronicle of the kings of Alba』では、彼は、Cinnbelachoir<sup>5</sup> の王宮で4月13日に死亡した、と報告され、その死因は、報告されていない。

彼の後継者は、キナエズの息子コンスタンティンあるいはコンスタンティン1世 (Constantín mac Cináeda あるいは Constantine I) (在位 862 年-877 年) で、ケネス1世の息子であった。

---

<sup>4</sup> この侵攻は、ゴフレッド・マック・フェルグサ (Gofraid mac Fergusa) (生没不明; 9世紀に活動) によって実行されたと『Annals of Four Masters』では報告している。ここでは、“Gofraid mac Fergusa, chief of Airgfalla, went to Alba, to strengthen the Dál Riadta, at the request of Cináeda mac Ailpín.” と報告されている。これが839年に起こったと考えられる。この報告は真実であろうか。多分、後の追加項目であろう。ドナルド氏族 (Clan Donald) の捏造ではないかと思われる。

この年代記は、17世紀に、4人 (中心人物は Mícheál Ó Cléirigh である) のマスターによって編纂され、主にそれ以前の年代記の集めたものである。ただ、17世紀の記録も含まれている。

<sup>5</sup> この地名の所在地は不明である。多分、そこはスクーンの近くであろうと思われる。

コンスタンティン1世の治世の特徴は、ヴァイキングとの戦いであった。実際、彼自身もヴァイキングとの戦いで死亡した。

ブリテンの北方でのヴァイキングの活動は、コンスタンティン1世の治世時に、最高に達した。ヴァイキングの軍隊は、小さな同族のグループに導かれていた。イングランドでのヴァイキングの活動は、865年に、東アングリア王国<sup>6</sup>に the Great Heathen Army (異教徒の大軍隊) が上陸したときから始まった、と思われる。これは、9世紀後半イングランドを略奪し、イングランドなどを征服するために、デンマークで組織された大軍隊であった。この軍隊は、Ívarr Ranarsson (873年没) と Halfdan Ranarsson (877年没) によって指揮された。この軍隊は、東アングリアに上陸し、その王を殺害し、北上し、ノーザンブリア王国の首都ヨークを包囲した。ノーザンブリア王国では、オズベート (Osberht) (867年3月21日没) とアラ (Alla) (867年3月21日没) は、協力して、その大軍隊と交戦するが、しかし、ノーザンブリア側は敗北し、その2人の王の候補者は、867年3月21日に、殺害された。ヴァイキングの大軍隊の指導者は、ノーザンブリア王として、エグバート (Ecgbert) (在位 867年-872年) (873年没) を就けた。この王の役割は、ヴァイキングの徴税人であった、と思われる。ノーザンブリアを支配下に入れたヴァイキングの大軍隊は、マーシャ王国 (Kingdom of Merchia) に進攻・侵攻した。その王であったブルグレッズ (Burgred) (在位 852年-874年) は、868年に、ウェセックス王アシルレッド (Æthelred) (在位 847年-871年)、および、アルフレッド大王 (Alfred the Great) (在位 871年-899年) の支援を得て、ヴァイキングを追い払った。ヴァイキングは、東アングリア王国、ノーザンブリア王国およびマーシャ王国を攻撃していた。

一方、これとは異なるヴァイキングの軍隊が北ブリテンで活動した。866年にアヴラプ・コヌング (Amlaíb Conung)<sup>7</sup> (873年あるいは874年あるいは875年没) とアウイスル (Auisle

<sup>6</sup> 東アングリア王国のエドモンド (Edmund) (869年没) がその異教徒の家臣になることを求められたが、この王がそれを拒否したので、彼は殺害された。Ívarr Ranarsson (873年没) は、Edmund 王を木に縛り、彼のヴァイキングがその王に矢を打ち付けた。

<sup>7</sup> アヴラプ・コヌングは、『Annals of Ulster』では、“son of the king of Lochlann” と報告されている。この Lochlann では、彼の父 Gofraid が王であった。Lochlann は、12世紀以降には、ノルウェーと理解されるようになるが、それ以前には、ヘブリーズのノルウェー (the Norse) およびノルウェー・ゲール人 (Norse-Gael) の土地、マン島、スコットランドの北部島嶼部を指していたと思われる。アヴラプ・コヌングについては、『Fragmentary Annals』によると、“the sixth year of reign of Máel Sechnaill, Amlaíb Conung, son of the king of Lochlann, came to Ireland, and he brought with him a proclamation of many tributes and taxes from his father, and he departed suddenly.” と報告されている。彼は、彼の父の貢ぎ物 (年貢) と租税の声明書をもってアイルランドに来た。その時のアイルランド上王 (High King) は、マエル・ゼフネル (Máel Sechnaill) (在位 846年-862年) であった。彼がアイルランドに来たのは、853年頃であった。また、『Annals of Ulster』では、856年にマエル・ゼフネル王と異教徒との大闘争の

あるいは Ásl あるいは Auðgisl)<sup>8</sup> (867 年没) の兄弟に導かれたヴァイキング (ノルウェーあるいはノルウェー・ゲール人のヴァイキング) がピクト (フォトリウ) を襲い、貢ぎ物 (年貢) と人質を獲得した。アヴラブについて、『Chronicle of the king of Alba』には、"And after two years Amlaib with his Gentiles wasted Pictland, and dwelt in it from January 1<sup>st</sup> to March 17<sup>th</sup>." また、"Again, in his third year, Amlaib, drawing a hundred, was slain by Constantine." とある。アヴラブがスコットランドを侵攻したのは、この年代記では、864 年から 866 年の間で、彼の死亡は、871 年あるいは 872 年頃にであったと記録されている。死亡年については、873 年であると他の年代記にある。

アヴラブ・コングとイヴァール (Ívarr あるいは Ímar)<sup>9</sup> は、870 年にアルト・カルト王国の首都ダンバートン・ロック (Dunbarton Rock) を攻撃し、4 ヶ月かけてそこを落とした。

---

ときには、彼は、その王に加担したと報告されている。しかし、859 年にアヴラブ・コヌングとイヴァールは、オスリゲ王ケルバル (Cerball mac Dúnlaine) (888 年没) に加担し、マエル・ゼフネルに対抗した。

『Annals of Ulster』によると、859 年にオスリゲ王ケルバルは、アヴラブ・コヌングとイヴァールの支援のもと、ミーズ王国 (マエル・ゼフネルがミーズ王であった) を侵略した。862 年にも、アヴラブ・コヌングとイヴァールは、アエダ・フィンリアス (Áed Finnliath) を支援して、マエル・ゼフネルと戦った。

<sup>8</sup> 彼は、アヴラブ・コヌングおよびイヴァールの兄弟であった。866 年に、彼は、アヴラブ・コヌングと共にスコットランド侵略遠征を行った。一方、イヴァールは、東アングリア、マーシャおよびノーザンブリアの the Great Heathen Army に加わった。『Annals of Ulster』では、"Auisle, one of three kings of the heathens, was killed by his kinsmen in guile and parricide." とある。アウイスル (Auisle) は親戚の者に殺された。『Fragmentary Annals』では、彼は、アヴラブ・コヌングによって殺されたとしている。妻を巡る争いが原因であった。それは、Cináed の娘であった。これには、2 人の候補者がいた。その一人は、南部イー・ニエル族に属する Sil nÁedo Sláine で、クノウス王 (King of Knowth) のキナエズ・マック・ゴナイング (Cináed mac Conaing) (851 年没) の娘、他はピクト王キナエズ・マック・アルピン (ケニス 1 世) (Cináed mac Ailpín) (在位 843 年? - 858 年) の娘であった。

<sup>9</sup> 彼は、Ivar the Bonless と同一人物であると考えている。彼は、865 年に彼の兄弟アルフダン (Halfdene あるいは Halfdan Ragnarsson) (在位 875 年 - 877 年) およびウバ (Hubba あるいは Ubbe Ragnarsson) (878 年没) と共に、the Great Heathen Army を指揮し、東アングリアを侵略し、直ぐに和解し、866 年に馬で北に向かった。そして、ノーザンブリア王国からヨークを 867 年に奪った。彼は、869 年 11 月のデーン人による東アングリア王国のエドマンド王の殺害に関与したと思われる。エドマンド王がその (彼の) 家臣になることを拒否したので、その王を木に縛り、矢を体に打ち込み、聖セバスティアン (Saint Sebastian) (288 没) と同様の方法で彼を殺害した。869 年以降、彼は、the Great Heathen Army の指揮を 2 人の兄弟に託し、ダブリンに移動した。

彼は、イー・イヴァール (Uí Ímafr) 王朝、すなわち、イヴァール王家の創始者であると考えられている。この王朝は、9 世紀中頃から 10 世紀中頃の初めに掛けて、ヨークからノーザンブリア王国を支配し、ダブリン王国からアイリッシュ海域 (マン島および島嶼部とスコットランド西海岸を含む) を支配した王朝であった。また、彼らの子孫であるゴッズレッズ・クロヴァン王家 (The House of Godred Crovan) は、11 世紀から 13 世紀中頃まで、マン島および島嶼部の王として、そこを支配した。彼の死について、『Annals of Ulster』では、"Ímar, king of the Norsemen of all Ireland and Britain, ended his life." と報告している。また、『Fragmentary of Annals of Ireland』では、彼の死を、"The king of Lochlainn, i.e., Gothfráid, died of a sudden hideous disease. Thus it pleased God." と報告している。



871年には、彼らは、多くの捕虜（アルト・カルトなどのブリテン人、アングル人、およびピクト人）を連れてアイルランドのダブリンに戻った。首都を破壊されたアルト・カルト王国は、ダンバートンを捨てて、ゴーヴァン(Govan)に新しい都を置いた。ヴァイキングの捕虜にされていたアルト・カルト王国の王ドゥムナグゥアルの息子アルトガル (Artgal mac Dumnagual) (在位不詳；872年没)は、2年後に、コンスタンティン1世の同意あるいは扇動によって殺害された。このアルトガル王の後継者ルン(Run) (在位872年-878年)は、コンスタンティン1世の娘と結婚していた。アヴラブ・コヌング<sup>10</sup>は、873年か、あるいは、874年頃に、スコットランドを略奪している最中に、コンスタンティン1世によって殺害された、と思われる。

875年にヴァイキングとピクト人は、スコットランドのクラックマナンシャー(Clackmannanshire)のダラー(Dollar)近くで戦闘し、『Annals of Ulster』によると、多数のピクト人が殺戮され、ピクト人は、アサル(Atholl)に追いやられた。また、877年にヴァイキングとの戦いで、コンスタンティン1世は殺害された、と思われるが、その場所については不明である。その候補地として、ファイフ州ニューポート・オン・タイの近くのインヴェルドバト(Inverdoval),あるいは、クレイル(Crail)近くのファイフ・ネス(Fife Ness)が挙げられている。

コンスタンティン1世の後継者は、キナエズの息子アイダ(Áed mac Cináeda) (在位877年-878年)であった。彼は、コンスタンティン1世と兄弟であった。彼の在位が1年であるので、彼の記録すべき事績はないと『Chronicle of the kings of Alba』には、記述されている。この年代記では、彼の死について、“Edus (Áed) held the same (the Kingdom) for a year. . . He was slain in the civitas of Nrurium.”と報告している。彼は、Nruriumの修道院で殺害された。この場所は、アバディーンシャーのインヴェルリー(Inverurie)ではないか、と考えられている。彼を殺害した人物は、『Annals of Ulster』によると、アイダ王の連合者(associates)であった。もしかして彼の従兄弟で、次の国王キリク(Giric)あるいはエオハズ(Eochaid)であったのかも知れない。アイダ王には、2人の息子があったが、アイダ王が殺害されたとき、その2人は幼かったと考えられる。

アイルランドの年代記や『Anglo-Saxon Chronicle (アングロ・サクソン年代記)』では、キリク(Giric mac Dúngail) (在位878年?-889年)については何も言及されていない。こ

<sup>10</sup> アヴラブ・コヌングは、Olaf the Whiteと同一人物であると考えられている。スカンジナビアンのサガ(saga)では、彼は、オラフ(Olaf)と語られ、アウズ(Aud the Deep-Minded) (834年生-900年没)と結婚している。彼女は、ヘブリーズ島嶼部の支配者ケティル・フラトノズ(Ketil Flatnose)の娘であった。オラフとアウズには、息子スオルスタイン(Thorstein the Red) (9世紀に活動)がいた。オラフの死(873年あるいは874年)後、スオルスタインとその母親(アウズ)は、ケティル・フラトノズの支配下に入った。

の王については知られていることは殆どないが、スコットランドの中世の中期を考える上において重要な人物であると思われる。『Prophcey of Brechán』では、彼は、“Son of Fortune (Mac Rath)”と呼ばれている。そこでは、キリク王について、次のように予言されている；  
 “the Son of Fortune shall come; he shall rule over Alba as one Lord. The Britons will be low in his time; high will be Alba of melodious beats.” また、“The rule of the Son of Fortune in his land in the east will cast misery from Scotland.” そして、“He will have in bondage in his house Saxons, Foreigner, and Britons.” と述べている。これは、キリクの王家が、サクソン人、ヴァイキング、およびブリトン人を纏めることを予言している、と推測させる。しかし、実際に、キリク王家がサクソンやヴァイキングを押さえ込むことができたかどうかは分からない。これを裏付ける歴史的事実は、現在までには、発見されていない。何故、12世紀に編纂されたその著作において、過去の出来事をこのように予言書（詩）のように編集する必要があったのであろうか。これについては、よく分からない。これは、アイルランドの大修道院長 Berchán によるものであるが、その詩形式の予言書の後半では、24人のスコットランド王のことが述べられるが、それは、実際の名前を挙げることなく、渾名で詠われている。Son of Fortune を実際のキリク王と同じであると解釈するには、論理的には無理なのであろうか。

『Chronicle of the kings of Alba』では、“And Eochodius (Eochaid) son of Run, grandson of Kenneth by his daughter, reigned for 11years; although others say Ciricius (Giric) son of another, reigned at this time, because he became Eochaid’s forster-father and guardian.” と報告されている。ここで、Kenneth がケニス1世で、エオハズ (Eochaid) はケニス1世の娘の息子である。キリクは、son of another と記録され、ケニス1世の兄弟ドムナルあるいはドナルド (Domnall あるいは Donald) の息子である、と解釈される。そうであるならば、エオハズとキリクは、従兄弟であった、と解釈される。エオハズが11年間ピクト王国を治め、キリクが彼のガーディアン（守護者）である、と報告している。この報告のキリクと、『Prophcey of Brechán』の Son of Fortune としてのキリクとは大きなずれがある。

『Chronicle of Melrose』では、“Giric, Dungal’s son, reigned for twelve years; and he died in Dundurn, and was buried in Iona. He subdued to himself all Ireland, and nearly all England; and he was the first to give liberty to the Scottish church, which was in servitude up to that time, after the custom and fashion of the Picts.” とキリク王を説明している。ここでは、キリクがピクト王国を12年間治めたとあり、さらに、彼は、アイルランドおよびイングランドを従え、スコットランド教会をピクトの慣習や風習から解放し、そこに自由をもたらしたと報告している。しかし、『Duan Albanach』には、エオハズ王もキリク王も報告されていない。



彼の後継者は、コンスタンティンの息子ドムナルあるいはドナルド2世 (Domnall mac CausantínあるいはDonald II) (在位889年-900年)であった。『Chronicle of the kings of Alba』では、ドナルド2世は、889年から900年までの11年間治め、デーン人との戦いに勝利していたが、900年に Opidum Forther で異教徒に殺害された、と報告されている。ここでは、"He was killed at Opidum Fother by the Gentiles" とある。この Opidum Forther は、アバディーンシャーのダンノッター (Dunnottar) である、と解釈されている。『Prophecy of Berchán』では、彼がダンノッターで死亡したが、彼はデーン人ではなく、ゲール人によって殺害された、と報告されている。このゲール人とは、Norse-Gael のことであろう。『Annals of Ulster』および『Chronicon Scotorum』では、彼の死亡を900年と報告し、さらに、彼をピクト王 (king of the Picts) ではなく、アルバ王 (king of Alba) と報告し、彼はマリー州のフォールズ (Forres) で死亡した、と報告されている。

## 第2節 コンスタンティン2世とその周辺国

コンスタンティン2世 (Constantine II あるいは Constantín mac Áeda) (在位900年-943年?) の時代の周辺国の状況を概観しておこう。ここでの周辺国とは、ウェセックス王国、ノーザンブリア王国、ストラスクライド王国、ダル・リアダ王国およびアイルランドの国々のことである。

(1) 最初に、ウェセック王国から覗いてみよう。ウェセックス王国では、アルレッド大王 (Alfred the Great) (在位871年-899年) が899年に死亡し、エドワード (Edmward the Elder) (在位899年-924年) がテムズ川の南を支配し、その大王の長女アシルフレッド (Æthelflæd) (869年あるいは870年-918年没) とその義理の息子アシルレッド (Æthelred) (在位911年) がイングランド西マーシャを支配した。彼の死後、アシルフレッドが8年間マーシャ王国を支配した。彼女は、916年にウェールズ、917年にダービーに遠征し、918年にはレスターを奪い、ヨークが彼女に臣従を誓ったが、その年に死亡した。彼女の息子アルフイン (Ælfwyn) (?) が後継したが、彼は、エドワードに従った。エドワード王は、マーシャ王国を支配した。919年に、アイルランドで活動していたイヴァールの孫ジトリック・カエフ (Sihtric Cáech) (ノーザンブリア王在位921年-927年、ダブリン王在位917年-921年)<sup>11</sup>

<sup>11</sup> ジトリック・カエフは、919年にはダブリン王になっていた。彼は、アイルランドの上王 Niall Glúndub (在位916年-919年) と何回か戦い、919年にダブリンの戦いでその王を殺害した。ラグナルの死亡後、彼は、ダブリン王をゴフレズ (在位921年-934年) に譲り、ヨーク王になった。その後、彼は、キリスト教を受入れて、926年にウェセックス王アシルスタン (Æthelstan) (在位924年-939年) の娘と結婚した。これは、アシルスタン王がイングランド北部に影響力を持つために計画された政治的な動きであったが、翌

が北西マーシャを攻撃した。920 あるいは 921 年にエドワード王は、コンスタンティン 2 世、エズレツ、およびストラスクライドの王（ドナルド 2 世かオウエン 1 世）と会合をもった。しかし、イングランド連合国を形作る前に、エドワード王は、924 年に死亡した。その後、一時的に、ウェセック王国が分裂するが、アルフワード（Ælfweard）王が急死した。再び、エドワード王の意思を継承し、ウェセック王国を統一した王は、ウェセックス王アシルスタン（Æthelstan）（在位 924 年あるいは 925 年-939 年）であった。このとき、ウェセックス王国は、ブリテンおよびアイルランドで最も強大な王国であった。彼の力は、フォース湾の北まで達していた。アシルスタンは、コンスタンティン 2 世、ストラスクライド王オーエン、ウェールズ王の反対に直面した。彼は、ジトリックの死後、ノーザンブリア（ヨーク）王に就いたイヴァールの孫ゴフレツ（Gofraid あるいは Gothrith ua Ímair）（在位 927 年）を追出し、ヨーク王（在位 927 年-939 年）にも就いた<sup>12</sup>。ヨークを追い出されたゴフレッドは、コンスタンティン 2 世のピクト国に逃げた。このことがウェセックス王アシルスタン（Æthelstan）とコンスタンティン 2 世との間の争いの原因になった。927 年 7 月 2 日に Eamont bridge で会議で、コンスタンティン 2 世、オーエン、およびウェールズの Hywel Dda（ヒュエル・ズダ）（880 年生-950 年没）との間で偶像崇拜を禁止することに調印した。これは、彼らがヴァイキングとは同盟や連携しないという協定であった。

(2) 次に、ノーザンブリア王国を覗いてみよう。エオフリ（Eohri）王（902 年から 904 年の間に没）が東アングリア王国を支配していたが、エオフリ王からグースレッドあるいはグースフリス（Guthred あるいは Guthfrith）が彼に代わって東アングリア王になった。このとき、彼は、既に、奴隷の身分からノーザンブリア王（在位 883 年-895 年）に即位していた。その経緯はよく分からないが、『History of the Church of Durham』に記されている。また、彼がノーザンブリア全体を治めたかどうかは確認されていない。ピクト王国からの侵攻を防ぐために、彼の下でノーザンブリア王国はヴァイキングと連帯したのかも知れない。彼の死後もヴァイキングの王がノーザンブリアを治めた。ヴァイキング王はヨークを首都として治め

年、彼はキリスト教徒とのその結婚を破棄した。その年に彼は急死した。ジトリック・カエフの死後に、イヴァールの孫ゴフレツ（Gofraid あるいは Gothrith）（ノーザンブリア王在位 927 年）がヨーク王を継承したが、しかし、6 ヶ月以内にアシルスタン王に彼は追放された。ゴフレッドは、ダブリンに戻り、再びダブリン王に就いた。

<sup>12</sup> 937 年にブルナンバラの戦い（Battle of Brunanburh）で、ダブリン王国のゴフレツの息子のアヴラプ、アルバ王国のコンスタンティン 2 世王およびストラスクライド王国のオーエン王の連合軍は、ウェセック王国のアシルスタン王とエドマンド 1 世を攻撃したが、敗北した。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、連合軍の 7 人の若い王と連合軍の貴族（高官、earl）およびコンスタンティン 2 世の若すぎる息子の死が記されている。その戦勝によってアシルスタン王のイングランドの統一が認められた。937 年と 939 年の間に発布された王の勅許状には、“totius rex Brittanniae”（Ruler over all Britain）と記されている。

た。

ノーザンブリア王国は、ヴァイキングのヨーク王国とバンブルク (Bamburgh) を中心とする王国 (嘗てのベルニシア王国) に分割された。『Annals of Ulster』によると、Bamburgh を中心とする領地をイーダルフあるいはエズウルフ (Eadulf あるいは Eadwulf) (913 年没) が支配した。彼は、"ruled as reeve of the town called Bamburgh." に報告されるように、reeve (執事, 代官) であった。また、"king of the Saxons of the north." と報告されている。バンブルグ (Bamburgh, すなわちノーザンブリア王国の北部) は、タイ川あるいはティ川からフォースに至る土地で、その領地を彼の息子エズレッズ (Ealdred) (934 年頃没) が 913 年から支配した。エズレッズは、ウェセック王エドワード (Edward the Elder) の友人であったが、彼の土地はイヴァールの孫ラグナル (Ragnall ua Ímair) (920 年あるいは 921 年没) に奪われ、彼は、コンスタンティン 2 世の所に逃亡し、コンスタンティンの支援のもと 918 年に Battle of Corbridge でラグナル (Ragnall) と戦った。これは決着が付かない戦いであった。つまり、Ragnall は、依然として、ノーザンブリア王国の南の支配者であった。

その後、ノーザンブリアは、ジグルズあるいはジワーズ (Sigurd あるいは Siward)<sup>13</sup> (ノーザンブリア王在位 1041 年-1055 年) とクヌート (Cnut) (イングランド王の在位期間は 1018 年-1035 年) に引き継がれた。

(3) 次に、ストラスクライド王国とダル・リアダ王国を覗いてみよう。ストラスクライド王国は、北はレノックス (Lennox), 東はフォース川, 南は Southern Uplands に及ぶ王国であった。その王国の中心がダンバートンからゴーズヴァンに移された後のストラスクライド王国の初代王は、『Chronicle of the Kings of Alba』のみから知られるが、ディフンヴァル 1 世, ドムナル 1 世あるいはドナルド 1 世 (Dyfnwal I, Domnall I あるいは Donald I)<sup>14</sup> (在位不詳; 908 年から 916 年の間に没)<sup>15</sup> であった。『Chronicle of the King of Alba』では、彼は、アルバ王国の王コンスタンティン 2 世 (Constantin II あるいは Constantín mac Áeda) (在位 900 年-943 年) の治世下で死亡した、と報告されている。ストラスクライド王国は、コンスタンティヌス 2 世のアルバ王国の従属国であった、と推測される。次の王は、ディフ

<sup>13</sup> アルザクヌート (Harthcnut) (在位 1040 年-1042 年) は、ジワーズ (Siward) にエズウルフ 3 世 (Eadwulf III) (在位 1038 年-1041 年) を暗殺させた。これによって、古くから続いてきたバンブルグの earl (宮廷貴族) は、彼の代で途絶えた。ジワーズは、スカンジナビア人で、クヌート大王がイングランドを支配した後にイングランドに現れた軍人であった。また、彼は、クヌート大王、ハロルド・アレフット王、アルザクヌート王、そして告白王エドワードに仕えた。

<sup>14</sup> ゲール語では、Domnall といい、英語では Donald という。彼は、ピクト王国の王でもあったエオハイズ・マック・ルン (Eochaid mac Run) の後継者で、エオハイズ (Eochaid) の親戚であったのかもしれない。しかし、このことを知らせる資料は見つかっていない。

<sup>15</sup> "Doneualdus king of the Britons died" とある。彼の治世については彼の死亡以外には分らない。

ンヴァル 2 世, ドムナル 2 世あるいはドナルド 2 世 (Dyfnwal II, Domnall II, あるいは Donald II) (在位 916 年-934 年) であった。彼は、アエダの息子ドムナル (Domnall mac Áeda)<sup>16</sup> とも呼ばれた。『Chronicle of the King of Alba』には、彼がディフンヴァル 1 世 (Dyfnwall I) の王位を継いだ、と記録されている。彼の治世については何も知られていない。ストラスクライド王国は、依然として、コンスタンティヌス 2 世のアルバ王国に従属していた、と推測される。その次の王は、オーガン 1 世あるいはオーエン 1 世 (Eógan I あるいは Owen I)<sup>17</sup> (在位不詳; 937 年没) であった。『Symeon Durham』には、"Ouuen, king of the Cumbrians (オーエン, カンプリアの王)" とある。彼は、カンブリア人の王で、ディフンヴァル 2 世 (Dyfnwal II) の息子であった。937 年のブルナンブルの戦い (Battle of Brunanburh)<sup>18</sup> で、彼は殺害された、と思われる。このとき、ストラスクライド王国がアルバ王国の属領であったのかどうか、あるいは、独立国であったのかどうかは不明である。

ダル・リアダ王国を一瞥してみよう。ドンゴイルケ (Donncoirce) (792 年没) 王が、現存するアイルランド年代記のダル・リアダ王国の王と呼ばれる "最後の国王" であった、と思われる。『Annals of Ulster』に、彼の死は、報告されている。しかし、『Duan Albanach』などの他の年代記には、彼の死亡記録はない。彼以降は、ダル・リアダ王国はピクト人に支配され、ピクト王国の王がダル・リアダ王を兼ねた、と思われる。9 世紀になって、タイズグの息子ゴナル (Conall mac Taidg) (在位 805 年-807 年)、アイダーンの息子ゴナル (Conall mac Áedáin) (在位 807 年-811 年)、コンスタンティンの息子ドムナル (Domnall mac Caustantín) (在位 811 年-835 年) などのダル・リアダ王国の王と思われる名前が伝えられている<sup>19</sup>。また、『Duan Albanach』によると、コンスタンティンの息子ドムナルは、24 年の間、

<sup>16</sup> Domnall mac Áeda は、コンスタンティン・マック・アエダ (Constantín mac Áeda あるいは Constantin II) と兄弟であったことになる。しかし、このことを証す資料は見付かっている。

<sup>17</sup> 彼がアルバ王国の王コンスタンティン 2 世の甥であったという説もあるが、しかし、これを証明する資料は見付かっている。

<sup>18</sup> ダブリン王ゴフレズの息子のアヴラフ (Amlaíb mac Gofraid) (ダブリン王在位 934 年-940 年、ノーザンブリア王在位 939 年-941 年)、アルバ王国のコンスタンティン 2 世およびストラスクライド王国のオーエン王の連合軍は、ウェセック王国のアシルスタン王 (Æthelstan) (在位 924 年-939 年) とエドマンド 1 世 (Edmund I) (在位 939 年-946 年) を攻撃したが、敗北した。『Anglo-Saxon Chronicle』によると、連合軍の 7 人の若い王と連合軍の貴族 (高官, earl) およびコンスタンティン 2 世の若すぎる息子の死が記されている。その戦勝したアシルスタン王のイングランドの統一が認められたと推測される。すなわち、937 年と 939 年の間に発布されたこの王の勅許状で、アシルスタンは、"totius rex Brittanniae" (Ruler over all Britain) と記されている。

<sup>19</sup> この 2 人のゴナルについては、『Annals of Ulster』で言及されている。ゴナル・マック・タイズグはピクト王コンスタンティン 1 世と戦い、敗北し、逃亡したと記録され、ゴナル・マック・アイダンはゴナル・マック・タイズグを殺害したと記録されている。

ダリ・リアダ王国を治めたと記され、他の資料では彼は、2人のゴナルとアエズ・マック・ボアンタ (Áed mac Boanta) (在位 835 年-839 年) の間で、その王であった、と記録されている。この2つの記録から、ピクト王国の王コンスタンティン1世 (Constantín mac Fergusa) の息子ドムナルがダル・リアダ王国の王であった、と推測される。この時点でダル・リアダ王国は、ピクト王国の支配下に入ったと考えられる。

(4) 最後に、アイルランドの状況を見てみよう。この王国では、アイルランド王とヴァイキングとの戦いが9世紀中旬から断続的に続けられた。アイルランド王とヴァイキングのダブリン王国の関係は、時の経過と共に変化し、アイルランド王国の争いや対立に、ヴァイキングが支援・敵対することになり、ヴァイキングは、徐々に、アイルランドの地に、定住し始めた。コンスタンスティン2世の治世時のアイルランドは、上王を巡る争いに、ヴァイキング (ダブリン王国) が絡み、アイルランドの政情は、常に、流動的であった。

アイルランドでは、900年頃には、南部イー・ニエル (Southern Uí Néill) のコールマン部族 (Clan Cholmain) で、かつ、ミーズ<sup>20</sup>王であったフラン・ジンナ (Flann Sinna) (在位 879 年-916 年) (847 あるいは 848 年生-916 年没) が上王 (High King) に就いていた。彼は、ミーズ王、かつ、アイルランド上王であったマエル・ゼフナル (Máel Sechnaill) (上王在位 846 年-862 年) の息子であった。彼は、スコットランド王のコンスタンティン2世の叔母 (すなわち、ケニス1世の娘) のマエル・ヴィール (Máel Muire)<sup>21</sup> (913 年没) と結婚していた。以下でフラン・ジンナが王位に就くまでを追ってみよう。

コールマン氏族の王位の土台を確固たるものにした彼の父マエル・ゼフナルは、上王に就く前に、クロンマクノイス (Clonmacnoise) およびクロンファート (Clonfert) を攻めて、ヴァイキング (ノルウェー人) のテュルゲジウス (Turgesius あるいは Thoregest)<sup>22</sup> (845

<sup>20</sup> ミーズは、アイルランド中世の王国で、千年以上続いた王国である。ミーズ (Mide) は、middle (中央) を意味し、ミーズがアイルランド中央にあることを意味している。中世においては、ミーズ王は、イー・ニエルのコールマン族の出であった。数人のアイルランド上王も輩出しているが、12世紀に王国は倒壊した。その後の王朝は、西に追いやられ、シャノン (Shannon) 川の東の土手に定住した。ここは、現在の Meath (ミーズ) と西ミーズ (Westmeath) の全てと、ガーヴァン (Cavan)、ダブリン、キルディアー (Kildare)、ロングフォート (Longfort)、ルース (Louth) およびオフアリー (Offaly) の一部を含んでいる。ミーズは、アイルランドの5地方 (マンスター、レインスター、コナハト、ウルスター、ミーズ) の一つである。

<sup>21</sup> 彼女は、2度結婚した。最初は、アエダ・フィンズリアス (Áed Findliath) (在位 862 年-879 年) であり、2度目は上王フラン・ジンナであった。彼女とアエダの間の息子がナイル・グウルングブ (Naill Glúndub) (上王在位 916 年-919 年) であり、フラン・ジンナの後を継ぎ、アイルランドの上王になった。彼女とフラン・ジンナとの間の息子が Domnall (921 年没) で、娘が Lígach (923 年没) であった。

<sup>22</sup> 彼は、ダブリン王国の最初の王であったと思われる。839年にダブリン王になったと推定され、彼の在位は 839 年-845 年であった。



年没)を捕らえ、845年に、Owel湖で彼を溺死させた。彼の父は、851年にブレガ<sup>23</sup>王ゴネーンフの息子キナエダ(Cináeda mac Conaing)<sup>24</sup>(在位849年-851年)を南ブレガ(ラゴル)王ティゲルナフ(Tigernach mac Fócartai)<sup>25</sup>(865年没)の支援を得て殺害した後に、ヴィレダフの息子でウルスター王マツダン(Matudán mac Muiredaig)<sup>26</sup>(在位839年-857年)とアーマーの大修道院長ディアルマイト(Diarmait ua Tigernáin)<sup>27</sup>(852年没?)に会い、彼は、ウルスターによって上王(High King)と認められた。だが、852年にマエル・ゼフナルによってアーマーが襲撃されていたので、ウルスターとマエル・ゼフナルの間の争いは終わってはいなかった<sup>28</sup>。また、南部イー・ニエルにとって脅威であったオーワナフト族のマンスター王フェイズリミズ(FeidlimidあるいはFedelimid mac Crimthainn)(在位820年-846年)が841年に南部イー・ニエルで上王であったニアル・カイル(Niall Caille)(上王在位833年-846年)との戦いに敗北し、マンスター王国が勢力を失っていたので、彼の父は、オーワナフト族のマンスター王から貢ぎ物や人質を得るために、何度(854, 856そして858年)かマンスター王国を侵攻するために遠征した。しかし、彼の目論見は、レインスターのオスリゲ王(king of Osraige)であったケルバル(Cerball mac Dúnlainge)(在位842年-888年)によって妨げられた。ケルバルは、859年には、マンスターと共同して、ミーズ王国を襲撃し、また、アヴラブおよびイヴァールと連携して、マエル・ゼフナルのミーズ王国に侵攻した。その後、マエル・ゼフナルは、アエダ・フィンリアス(Áed FinnliathあるいはFindliath)

<sup>23</sup> ブレガは、6世紀にイー・ニエルに統合され、8世紀の中頃、南部イー・ニエル族の系列で力のあった Síl nÁedo Sláine が二分した。その南ブレガ(King of Lagore)がイー・シェルネイ(Uí Chernaig)氏族によって支配され、その北ブレガ(King of Knowth)がイー・チョネインフ(Uí Chonaing)氏族によって支配された。大抵、ブレガ王は、南北のブレガを同時に支配した。

<sup>24</sup> 彼は、南部イー・ニエル部族の Síl nÁedo Sláine のイー・チョネインフ(Uí Chonaing)氏族に属していた。かれは、ラゴル王ティゲルナフと対立していた。850年に彼は、ヴァイキングと共同して、ラゴル王ティゲルナフの土地を襲い、その教会や定住地を焼いた。翌年、マエル・ゼフナルとラゴル王ティゲルナフに騙されて、溺死させられた。『Fragmentary Annals of Ireland』によると、「Cináed」の娘がヴァイキングの Amlaib と結婚している。この「Cináed」が Cináed mac Conaing でないかと思われる。ピクト王 Cináed mac Ailpín(在位843あるいは844年-858年)であろうという説もある。

<sup>25</sup> 彼は、南部イー・ニエル部族の Síl nÁedo Sláine のイー・シェルネイ(Uí Chernaig)氏族に属していた。彼は、ブレガ王キナエダ(Cináeda mac Conaing)と彼の兄弟 Flann mac Conaing と対立していた。

<sup>26</sup> 彼は、ダル・ディアタッハ(Dál Fiatach)王であった。ヴァイキングが839年にNeagh湖に現れ、そこで840-41の冬を過ごした。これがヴァイキングによるウルズを含むアイルランド北部を襲撃する始まりであった。852年にはノルウェイ人はCarlingford湖でデーン人と戦うが敗北した。マツダン(Matudán mac Muiredaig)はノルウェイ軍を支援し、土地を与えた。

<sup>27</sup> 彼は、アーマーのカトリック司教で、834年にその司教に就いた。彼は、彼の司教区から争奪者に追放された。彼は、841年にアーマーを襲い教会を倒したヴァイキング(ノルウェイ人)のテュルゲジウス(Turgesius)の下で流浪者として生活した。

<sup>28</sup> しかしながら、ウルスターは、856年にマエル・ゼフナルに軍隊を提供している。



に指揮された北部イー・ニエル (Northen Uí Néill) と対立した。彼は、860年にマンスター、レインスターおよびコナハトからの軍隊を指揮して、北部イー・ニエルと戦った。アエダとゴネンフの息子でブレガ王のフラン (Flann mac Conaing)<sup>29</sup> (在位? -868年) は、アーマー近くに野営していたマエル・ゼフナルの部隊を襲ったが、逆に、撃ち負かされた。その戦いは、861年と862年にも、繰り返された。北部イー・ニエルの脅威に晒され、マエル・ゼフナル王は、862年に死亡した。

マエル・ゼフナルの後継者アエダ・フィンリアス (Áed Finnliath あるいは Findliath)<sup>30</sup> (在位 862年-879年) は、マエル・ゼフナルとは対立していた北部イー・ニエルのケル・ネーガン (Cenél nEógain) 氏族の出であった。アエダは、マエル・ゼフナルの後継者のミーズ王であったロルカン (Lorcán mac Cathail) (在位 862年-864年) と対立し、争った。ロルカンは、Norsemen, すなわち、アヴラブ (Amblaib) (ダブリン王在位 853年-873年), イヴァール (Ímar) (ダブリン王 856年-873年) およびアウィスル (Auisle) (ダブリン王在位 853年-867年) と共謀し、アエダの支援者であった南ブレガ (すなわち、ラグル: Lagore) 王ゴンフォバル (Conchobar mac Donnchada) (864年没) や北ブレガ王 (すなわち, king of Knowth) のゴネンフの息子フラン (Flann mac Conaing) (868年没) を捕らえ、ゴンフォバルとフランの家臣を Norseman のアヴラブ (Amblaib) の命令で、クロナード (Clonard)<sup>31</sup> の近くで溺死させた。アエダは、ロルカンを捕らえ、失明させた。そのためにロルカンは王位を退位した。

866年に、アエダは、Norse-Gael (ヴァイキング) のアヴラブ (Amlaib) とイヴァール (Ímar) がその多くの軍隊と共にスコットランドを攻撃するためにアイルランドを離れたときに、アイルランド北部のヴァイキングの居住地を襲い、焼き払い、フォイル湖 (Lough Foyle)<sup>32</sup> で

<sup>29</sup> 彼は、フランの息子ブレガ王ゴネンフ (Conaing mac Flainn) (849年没) の息子で、ミーズ王のフランの妻コムルレス (Gormlaith ingen Conaing mac Flainn) (870年頃活動) と兄弟であった。

<sup>30</sup> アエダ王は、3度結婚している。1人目が、ウルスター王の娘 Gormlaith Rapach であった。彼女の息子ドムナル (Domnall mac Aéda) であった。二人目は、オスリゲ王のケルバル (Cerball mac Dúnlainge) の娘 Lann であった。彼女は、アイルランド上王のマエル・ゼフナル (Máel Sechnaill) の末亡人であった。3人目の妻がピクト王ケニス1世の娘 Máel Muire であった。彼女の息子ニアル・ジルウイングはアイルランド上王であった。彼女は、アエダ王の死後、上王フラン・ジンナと結婚した。

<sup>31</sup> これは、ミーズ州にある人口350人に満たない小さな村である。この村は、初期キリスト者の土地であった。そこは、司教パラディウス (Palladius) (408年生? -457年あるいは461年没) の縁の地であり、現在のミース (Meath) 地方のボニー川 (River Boyne) のほとりにクロナード修道院 (Clonard Abbey) を建てられた聖フィニアン (Saint Finnian) (470年-549年?) が知られている。ヴァイキングはこの修道院を襲撃したと思われる。

<sup>32</sup> フォイル湖は、ウルスター州のフォイル川の河口である。これは、フォイル川がデリーを離れるところから始まり、Inishowen 半島とロンドンデリー州を分離している。

ヴァイキングを敗北させた。『Annals of Ulster』によると、868年に、アエダは、再度、アイルランドの競合者連合(イー・ニエルのブレガ王、ラギン<sup>33</sup>王)およびアヴラブとイヴァールのNorse-Gaelと衝突し、彼らを敗北させた。この戦いで、ゴネンフの息子でブレガ王のフラン(Flann mac Conaing)は、殺害された。この戦いの後にも、アヴラブとイヴァールの勢力は弱まることはなく、彼らはアイルランドで活動した。870年にアエダは、新たな連合者オスリゲ<sup>34</sup>王ケルバル(Cerball mac Dúnlainge)(在位842年-888年)の支援を得て、レインスター<sup>35</sup>に侵攻した。このときには、アエダは人質を取ることはできなかった。874年にも、アエダはレインスター<sup>36</sup>に侵攻したが、879年に彼は死亡した。

ケネル・ネーガン氏族のアエダ・フィンリアス(Áed FinnliathあるいはFindliath)を継承したフラン・ジンナ上王は、888年のピルグリムの戦い(Battle of the Pilgrim)でダブリンのヴァイキングに敗北した<sup>37</sup>。しかしながら、ヴァイキング内輪争いによる分裂のため、アイルランドは救われた。ヴァイキングは、888年にイヴァールの息子でダブリン王のジグフリシ(Sigfrith mac Ímair)(在位883年?-888年)を失い、そして、894年にイヴァールの息子アヴラブ(Amlaíb mac Ímair)を失った。ヴァイキングは、イヴァールの孫でダブリン

<sup>33</sup> ラギンは、初期アイルランドのレインスター地方に住んでいた人々に与えられた名前である。その住民がどこからきた民族かについてははっきりしない。Leinsterは、“Laiginの国”を意味する。

<sup>34</sup> オスリゲは、キルキンニー(Kilkenny)州やラオイズ(Laois)州に住んでいたDeerという人々を意味する。この王国は、その西と南は、シュアー(Suir)川で境界付けられ、その東は、バロウ(Barrow)川の分水嶺でレインスターの境界が示され、その北はSlieve Bloom山脈に延びている。オスリゲの近隣国は、北および東では、レインスターのロイヒシュ(Loígsi)、イー・ヘンシュリッヒ(Uí Cheinnselaig)、およびイー・バルリッヒ(Uí Bairrche)であり、南および西ではマンスターのデーナムヴァーン(Déisi Muman)、オーワナフトカハシャ(Eóganacht Chaisi)、およびエリル(Elie)であった。9世紀の中頃まではマンスター王国の極東にあった。その後、レインスターに属した。

<sup>35</sup> このときのレインスター王は、Ailill mac Dúnlainge(在位869年-871年)であったと思われるが、オスリゲ王ケルバルと戦ったのは、レインスター軍の大将であったブレーンの息子ヴィレダフ(Muiredach mac Brain)(885年没)であった。

彼は、イー・ズィーニカ(Uí Dúnlaige)の氏族であった。レインスターは、ラギンという種族の住む土地を意味していた。この頃のレインスターは現在より狭かった。現在、レインスターは、中世のミーズ王国(ミーズ州と西ミーズ州)、オスリゲ王国、およびレインスター王国を含んでいる。8世紀までには、レインスター(ラギン)の支配者は、南と北に分裂した。南は、イー・ヘンシュリッヒ(Uí Cheinnselaig)、北はイー・ズィーニカ(Uí Dúnlainge)であった。

<sup>36</sup> このときのレインスター王は、ヴィルカーンの息子ドムナル(Domnall mac Muirecáin)(884年没)であったが、アエダと戦ったのは、このときもレインスター軍の大将であったブレーンの息子ヴィルダフ(Muiredach mac Brain)であった。

<sup>37</sup> 『Annals of Ulster』の報告によると、フラン側の死者の中には、コナハト王ゴンフォバルの息子アエダ(Áed mac Conchobair)(在位882年-888年)、キルディアーの司教(Bishop of Kildare)のレルグス(Lergus mac Cruinnén)(888年没)、キルディアーの大修道院長(Abbot of Kildare)のドンハズ(Donnchad)(888年没)が含まれていた。

王のイヴァール (Ímar ua Ímair) (在位 896 年-902 年) の一派とジフリス (Sichfrith Jarl) (ダブリン王在位 993 年-994 年) の一派に分裂した。ダブリン王国のヴァイキング (あるいは Norse-Gaels) の勢力が弱まり、894 年には、その一つのグループがダブリンを去り、アイルランド海域に定住した。他のグループは、902 年にフラン・ジンナの義理の息子でレインスター王ヴィルカーンの息子ケルバル (Cerball mac Muirecáin)<sup>38</sup> (在位 885 年-909 年) によって追放され、その後、西および北ブリテン (スコットランドやインナー・ヘブリーズなど) に姿を見せていた。902 年には、彼は、彼の義理の息子でレインスター王ケルバル (Cerball mac Muirecáin) に指揮されたレインスター人とマエル・フィンニア (Máel Finnia mac Flannacain) (903 年没) に指揮されたブレガ<sup>39</sup> 人と共にダブリンに遠征し、ヴァイキングをアイルランドから追い出した。904 年には、アルパ王コンスタンティン 2 世によってその軍は、破壊された。ヴァイキングのイー・イヴァール王朝は、ここで一度途絶えた、と考えられる。

フラン上王は、アイルランドの部族王に対しても攻撃を加えた。オスリゲ王ケルバルの息子ケルラフ (Cellach mac Cerbaill) (在位 905 年-908 年) が兄弟ディアルメト (Diarmait mac Cerbaill) (在位 894 年-905 年) の後を継いだ後に、フランは 905 年にオスリゲに遠征軍を送った。彼は、906 年にはマンスターを侵攻し、荒らした。その報復のために、マンスター王グウィルナーンの息子ゴンフォバル (Cormac mac Cuilennáin) (在位 902 年-908 年) は、彼の後継者および守り神と共にレインスターおよびコナハトを襲撃した。これにフランは敗北した。908 年に、フランは、義理の息子でヴィルカーンの息子のケルバル (Cerball mac Muirecáin) ならびにコナハト王ゴンフォバルの息子カサル (Cathal mac Conchobair) (925 年没) の支援のもと、マンスターと Belach Mugna in Mag Ailbe (現在のカルロウ州にある Ballaghmoone) で戦ったが、フランがマンスターに勝利し、マンスターのゴルマック王がこの戦いで死亡した。910 年に、フランは、ブレフネ王国 (Kingdom of Bréifne)<sup>40</sup> にも勝

<sup>38</sup> 彼は、イー・ズィーニカ (Uí Dúnlainge) の 3 つの氏族の一つであった Uí Fáeláin のメンバーであった。彼は、上王フランと共に、マンスターを侵攻し、マンスター王グウィルナーンの息子ゴンフォバル (Cormac mac Cuilennáin) を殺害した。

<sup>39</sup> ブレガは、アイルランド中世の王国である。その名は、現在のミーズ、ルース (Louth)、およびダブリン州に跨るブレガ平原に由来する。ブレガは、南部イー・ニエルのジル ナレズ ジレイン (Síl nÁedo Sláine) 族に属していた。ブレガ王国は、タラ丘陵を含み、その東はアイリッシュ海、その南は Liffy 川で境界づけられ、Boyne 川を横切ってルース州の foothill に延びていた。その西の境界ははっきりしない。

ブレガは、6 世紀にイー・ニエルに統合され、8 世紀の中頃までには二分した。南ブレガ (King of Lagore) は、イー・シェルネイ (Uí Chernaig) 氏族によって支配され、北ブレガ (King of Knowth) は、イー・チョネインフ (Uí Chonaing) 氏族によって支配された。大抵、ブレガ王 (over-king) は、南北のブレガを同時に支配した。

<sup>40</sup> 現在の Leitrim と Cavan の両州および Sligo 州の一部を含む領域であった。この領域には、イー・ブリューン・ブレフネと知られる部族が居住していた。8 世紀頃、ブレフネの地をコナハト部族の一つであったイー・

利した。913 年と 914 年にフランと彼の息子ドンハズ (Donnchad mac Flainn) (上王在位 919 年-944 年) が南ブレガおよび南コナハトを襲撃した。彼らは、多くの教会を汚した。915 年 2 月の戦いでは、フランの二番目の息子オエンガス (Óengus) が死亡した。915 年の後半には、彼の息子ドンハズ (Donnchad) およびゴンフォバル (Conchobar mac Flainn) (ミーズ王在位 916 年-919 年) は、次の上王ニアル・グゥンダブ (Niall Glúndub) の力を背景にして、フラン王に敵対した。ニアル・グゥンダブ (Niall Glúndub) は、フラン王とトレルグの息子フォルガルタフ (Forgartach mac Tolairg) (916 年没) の戦いに停戦を求めた。916 年に、フランは、西ミーズ州のムルリンガー (Mullingar) の近くで死亡した。

フラン・ジンナは、3 人と結婚している。その一人は、ブレガ王であったフランの息子ゴネンフ (Conaing mac Flainn) (849 年没) の娘コムルレス (Gormlaith ingen Conaing mac Flainn) (870 年頃活動) であった。2 人の娘コルムレス (Gormlaith ingen Flann Sinna)

(870 年生?-948 年没) は、ヴィルカーンの息子でレインスター王ゲルバルと結婚した。ゲルバルは、彼女の父フランの連合者で、レインスターのゲルバルはフラン上王の義理の甥であった。ゲルバルの死後、コムルレスは、アイルランドの上王ニアル・グルンダブ (Niall Glúndub) と結婚した。フランの 2 人目の結婚相手は、アエダ・フィンリアス (Áed Finnliath あるいは Findliath) の娘エイスネ (Eithne) であった。『Annals of Ulster』によると、2 人の息子マエル・ルアネズ (Máel Ruanaid) (901 年没) は、上王候補者であったが、901 年にコナフト王国の Luigne の人によって殺害された。エイスネは、ブレガ王 Flannácan と結婚し、その息子が Máel Mithig であった。3 人目がピクト王ケニス 1 世の娘マエル・ヴィール (Máel Muire) であった。彼女とフラン・ジンナ王との間の息子がドムナル (Domnall mac Flainn) (921 年没) (ミーズ王; 在位 916 年-919 年) で、娘がリガフ (Lígach) (932 年没) であった。彼女の息子のドムナルは、フランと彼の息子ドンハズ (Donnchad mac Flainn) によって殺害された。

フラン上王の後継者は、ニアル・ジルウインダブ (Niall Glúndub) (在位 916 年-919 年) であった。彼は、北部イー・ニエルのケル・ネーガンの出であった。前王フランは、南部イー・ニエルのコールマンの出であった。彼の母は、ピクト王ケニス 1 世の娘マエル・ヴィール (Máel Muire) であった。彼は、王国の拡張のために、ダル・ナレズ (Dal nAraidí) およびウルズ (Ulaid) 王を戦いで敗北させた。フラン王の死後、上王に就き、ヴァイキングと戦った。彼は、イー・ニエル、アーギャラ (Airgíalla) およびウルズの支援を得て、レイ

---

ブリューンが征服し、定住した。初め Leitrim 州、次に Cavan 州に王国を設立した。しかし、これを証明する資料は見あたらない。

ンスターに進行した。しかし、919年9月のキルマショフの戦い (Battle of Kilmashoge)<sup>41</sup>でダブリンに拠点を置くヴァイキングの棟梁ジトリック・カエフ (Sihtriuc Cáech あるいは Sihtric ua Ímair) (在位 917 年-921 年; 927 年没) の下の Northmen (あるいは Norse-Gael) によって、彼自身とミーズ王ゴンフォバルおよび多くの者が殺害された。この中には、フランの息子でミーズ王のゴンフォバー (Conchobar mac Flainn) (在位 916 年-919 年) やドンハズ・ドンの義理の兄弟で、フランカーンの息子でブレガ王のマエル・ミスイフ (Máel Mithig mac Flannácaín)<sup>42</sup> (919 年没) やドムナルの息子でエーレク王のフレスベルタフ (Flaithbertach mac Domnaill) (在位 916-919 年) も含まれていた。フレスベルタフは、上王継承候補者であった。

留意すべき点は、ヴァイキングの棟梁ジトリック・カエフ (Sihtriuc Cáech あるいは Sihtric ua Ímair) (在位 917 年-921 年; 927 年没) によって、ダブリン王国およびイー・イヴァール王朝が復興したことである。ダブリン王ジトリックの後継者は、ゴフレッドの息子のアヴラブ (Amlaíb mac Gofraid)<sup>43</sup> (在位 934 年-940 年) であった。このゴフレッド (Gofraid ua Ímair) は、イヴァールの孫であった。イー・イヴァール王朝の復興は、イヴァールの孫によってなされた。

上王ニアルとその継承者フレスベルタフおよびミーズ王ゴンフォバルがヴァイキングに殺害されたために、アイルランド上王およびミーズ王にはフラン王の息子のドンハズ・ドン (Donnchad Donn mac Flainn)<sup>44</sup> (在位 919 年-944 年) が就いた。彼は、南部イー・ニエルのコールマン氏族の出であった。彼は、彼の異母兄弟を殺害するなどして、自らの権力基盤を固め、他国との戦いに備えた。彼の最初の戦いは、現在のルース州のヴァイキングに対する戦いであった。その次の戦いは、ドンハズ・ドンとエーレク王ネイルの息子ヴィルハエルタフ (Muirchertach mac Neill)<sup>45</sup> (943 年没) との戦いであった。ヴィルハエルタフは、ドンハズ・ドンの娘であ

<sup>41</sup> キルマショフは、ダブリンのラスファークナム (Rathfarnham) の近くであった。ニアル・ジルウインダブ (Niall Glúndub) は、イー・ニエル、アーギアラ、およびウルズの支援の下で、レインスターに軍を進め、Northmen (ヴァイキング) との交戦を続けた。

<sup>42</sup> 彼は、南部イー・ニエルのジル・ネイド・スレイン (Sil nÁedo Sláine) のメンバーであった。

<sup>43</sup> 彼は、Olaf III Guthfrithson と呼ばれる。

<sup>44</sup> 彼の異母兄弟には、マエル・ルアネズ (Máel Ruanaid)、ゴンフォバル (Conchobar)、ドムナル (Domnall)、オエングス (Óengus)、アエダ (Áed)、ケルバル (Cerball) がいた。姉妹には、Gormlaith、異母姉妹にリガフ (Ligach)、Muirgel がいた。マエル・ルアネズは、上王候補者であったが、901年にコナフト王国の Luigne の人に殺害された。ゴンフォバルは、フラン王の後を継ぎミーズ王になったが、フラン王の息子のドンハズ・ドンによって殺害された。ドムナルは、ゴンフォバルの後を継ぎミーズ王 (919 年-921 年) になったが、ドンハズ・ドンによって殺害された。彼は、アエダ (Áed) を失明させた。リガフは、マエル・ヴィールの娘であり、ブレガ王のマエル・ミスイフ (Máel Mithig mac Flannácaín) と結婚していた。

<sup>45</sup> 彼は、北部イー・ニエルのケル・ネーガンの出であった。彼の父は、ニアル・グルウダブ (Niall Glúndub) で、彼の母は、フラン王の娘コムルレス (Gormlaith) であった。彼の母方の祖父は、フラン・ジンナであっ



り、彼の従妹であったフラン（Flann ingen Donnchadha）と結婚していたので、ドンハズ・ドン（Donnchad mac Donnchadha）は伯父であり、かつ、義理の父であった。しかし、両者の関係は良好ではなく<sup>46</sup>、927年、928年、そして938年に、両者は衝突した。940年に、彼の妻フランが死亡すると、ヴィルヘルムハタフは、ミーズ、オスリゲ、およびマンスター<sup>47</sup>を襲撃し、ドンハズ・ドンの権威を制限した。ヴィルヘルムハタフは、無情な軍人であったが、943年のヴァイキングとの戦いで死亡した<sup>48</sup>。このとき、ゴフレズの息子ブラケール（Blácaire mac Gofrith）<sup>49</sup>（在位940年-945年；948年没）がダブリン王国の王であった。ゴフレズの息子ブラケールがダブリン王に就いた経緯は、ダブリン王であった彼の従兄弟ジトリックの息子アヴラブ（Amlaíb mac Sitriuc）（在位945年-947年；927年生-981年没）が、ヨーク王であった彼の兄ゴフレッドの息子アヴラブ（Amlaíb mac Gofraid）を支援するためにノーザンブリア王国のヨークに向かったからであった。941年に兄アヴラブが死亡し、従兄弟のジトリックの息子アヴラブがヨーク王になった。ブラケールは、ダブリンに留まり、そこからダブリン王国を治めた。彼は、北に遠征し、943年2月にアーマー近辺にエーレク王ネイルの息子ヴィルヘルムハタフ（Muirchertach mac Neill）と戦った。その結果、彼は、ヴィルヘルムハタフを敗北させ、殺害した。その次の日アーマーが略奪された。944年にクノウス（Knowth）王マエル・ミスイフの息子ゴンガルフ（Congalach mac Máel Mithig）がレインスター王と共謀し、ダブリンを襲撃した。一方、同じ年に、ヨークを共同統治していた彼の従兄弟ジトリックの息子アヴラブとブラケールの兄ゴフレッドの息子ラグナル（Ragnall mac Gofraid）<sup>50</sup>（943年没？）はヨークを追い出さ

たので、南部イー・ニエルのコールマン族に繋がっていた。彼の父の母（彼の父方の祖母）は、ピクト王ケニス1世の娘マエル・ヴィール（Máel Muire）であった。このマエル・ヴィールは、彼の祖父アエダの死後、フラン・ジンナと結婚した。彼は、伯父ドンハズ・ドンの娘で、彼とは従妹であったフランと結婚した。よって、ドンハズ・ドンは、伯父であり、義理の父でもあった。しかし、ヴィルハタフとドンハズ・ドンの関係は良好ではなかった。940年に彼の妻フランが死亡すると、彼は、ミーズ、オスリゲ、およびマンスターを襲撃し、ドンハズ・ドンの権威を制限した。

<sup>46</sup> ヴィルヘルムハタフの父は、ドンハズ・ドンに殺害されていた。また、ヴィルヘルムハタフは、北部イー・ニエルのケル・ネーガンの子であった。ドンハズ・ドンとは対立する氏族であった。

<sup>47</sup> 彼は、マンスター王 Cellachán Caisil を人質にとって彼の権威を誇示した。

<sup>48</sup> 『Annals of Ulster』では、ヴィルヘルムハタフの死亡記事で彼を“the Hector of the western world” および王位の継承候補者と呼んでいる。

<sup>49</sup> ブラケールの父は、イヴァールの孫ゴフレッド（Gofraid ua Ímair）（ダブリン王在位921年-934年；934年没）であった。彼は、証拠はないが、イヴァール（Ímair；英語ではÍvar）の曾孫であったと推察される。彼の父の兄弟は、Sitric（927年没）、ラグナル（Ragnall）（921年没）、イヴァール（Ímar）（904年没）、アヴラブ（Amblaíb）（896年没）であったと思われる。ブラケールの兄弟には、ゴフレッドの息子アルブダン（Alpdann mac Gofraid）（927年没）、ゴフレッドの息子アヴラブ（Amblaíb mac Gofraid）（941年没）、ゴフレッドの息子ラグナル（Ragnall mac Gofraid）（943年没？）がいた。

<sup>50</sup> ヨーク王国（ノーザンブリア）は、944年にウェセック王国のエドマンド1世に征服された。アヴラブ・クアランはダブリンに戻ったが、ラグナルはエドマンドに殺害された。



れた。945年にジトリックの息子アヴラブはダブリンに戻ってきた。ブラケールは、ダブリン王から降ろされ、ジトリックの息子アヴラブがダブリン王に就いた。

ドンハズ・ドン上王の後継者は、マエル・ミスイフの息子ゴンガルフ (Congalach mac Máel Mithig)<sup>51</sup> (在位 944 年-956 年没) であった。彼は、北ブレガ王 (King of Knowth) で、南部イー・ニエルのシル・ネイド・スレイン (Sil nÁedo Sláine) のメンバーであった。また、フラン・ジンナ王の娘リガフ (Ligach) の息子であったので、彼は、母方から、フラン・ジンナと同じコールマン族であった。彼は、ヴァイキングのダブリン王ジトリックの息子アヴラブ (Amlaíb mac Sitric)<sup>52</sup> (在位 945 年-947 年; 927 年生-981 年没) と共闘した。945 年にゴフリスの息子ブラケールに代わって、ジトリックの息子アヴラブがダブリン王になった。アヴラブは、ゴンガルフと共闘して権力を握ったと考えられる。ゴンガルフは、ダブリン王ジトリックの息子アヴラブと共闘し、北部イー・ニエルケのネル・ゴーガンのルエドリ (Ruaidrí ua Cannanáin) (950 年没) と上王の座を巡って戦った。945 年に両者の共闘は、ルエドリ (Ruaidrí) にルース州 (County Louth) で敗北し、また、947 年にはルエドリ (Ruaidrí) は、ゴンガルフとジトリックの息子アヴラブをミーズ州のスレイン (Slane)<sup>53</sup> で敗走させた。ダブリン軍の損失は莫大で、多くのダブリンの溺死者が発生した。

947 年に、再び、アヴラブに代わってゴフリスの息子ブラケール (在位 947 年-948 年) がダブリン王に就いた。950 年に、ネル・ゴーガンのルエドリ (Ruaidrí ua Cannanáin) は、

<sup>51</sup> 彼は、ブレガ王マエル・ミスイフとリガフの息子であった。リガフは、フラン王の妻であったマエル・ヴィールの娘であったので、フランの息子ドンハズ・ドンとは兄妹になる。この関係から、マエル・ミスイフの息子ゴンガルフはドンハズ・ドンと従兄弟の関係にあると言える。

<sup>52</sup> ゴフレッドの息子のアヴラブ (Amlaíb mac Gofraid) がブリテンに渡り、ヨーク王アヴラブ (在位 939 年-941 年) が誕生した。彼は 2 年間ヨークを治め死亡した。彼の死亡後、ジトリック・カエクの息子アヴラブ・クアラン (Amlaib Cuarán あるいは Olaf Sihtricsson) (在位 942 年-944 年) がヨーク大司教ウルフスタン (在位 931 年-956 年?) によってヨーク王に迎えられた。彼は、ゴフレッドの息子ラグナル (943 年没) と共にヨーク王国を共同統治したかも知れない。944 年にウェセック王国のエドモンド 1 世 (Edmund I) (在位 939 年-946 年) に彼らは征服された。アヴラブ・クアランはダブリンに戻ったが、ラグナルは殺された。彼の死後、ウェセック王エドモンド 1 世 (在位 939 年-946 年) がヨークを奪い返した。彼が第 48 代目のヨーク王 (在位 944 年-946 年) であった。また、ウルフスタン大司教達は、オークニ王エリック・ブローダック (Erik Bloodaxe) をヨーク王として招聘した。しかし、948 年にウェセック王エズレッド (Eadred) (在位 946 年-955 年) は、ノーザンブリアに攻め入り、リポンのミンスターを燃やした。彼は、キャスルフォードの戦いで大損失を被ったが、エリックを捨てない限りノーザンブリアを襲撃することを伝え、エリックをヨークから追放した。949 年にノーザンブリアは、再び、ダブリンからジトリック・カエクの息子アヴラブ・クアラン (在位 949 年-952 年) をヨーク王として迎えた。この王位継承をウェセックス王エズレッドも同意していた。

<sup>53</sup> ミーズ州の小さな村である。人口は、1,099 (2006 年) である。この村は、ボニー川の左側の険しい丘陵にある。この村の北には高さ 158 メートルの丘 (the Hill of Slane) がある。この丘がキリスト教の修道院の敷地になった。アイルランドの北部で主に宣教活動をしていた聖パトリックは、スレインの司教を任命したと思われる。

アイルランド中央に攻め入り、ダンフパトリック (Donghpatarick) とケルズ (Kells)<sup>54</sup> の間のどこかに陣営を設け、ベルガとミーズを6ヵ月間包囲し、上王ゴンガルフとダブリン王のジトリックの息子ゴフレズ (Gofraid mac Sitriuc) (在位 948 年-951 年; 961 年没) を敗北させ、ゴフレズを追放した<sup>55</sup>。ダブリン軍は 2,000 人以上も死んだと思われる。しかし、ルエドリ自身と彼の息子はこの戦いで殺害された。ジトリックの息子ゴフレズは、ダブリンを奪ってケルズや他の教会を襲撃したが、『Chronicon Scotorum』によると、“-but God revenge it; he died in a short time-in which three thousand men were taken with gold and silver.” とある。彼は、聖なる復讐で死んだ、と報告されている。しかし、『Annals of Ulster』によると、ゴフレズの軍隊は、“Cenannnas” から襲撃され、3,000 人以上が捕虜にされ、金銀と共に持ち去られた。ダブリン王のジトリックの息子ゴフレズの後継者は、彼の弟ジトリックの息子アヴラブ (在位 952 年-980 年) であった。

### 第3節 ピクト王国からアルバ王国へ：資料『Chronicle of the kings of Alba』

ピクト王国あるいはアルバ王国に目を向けてみよう。最初に、ピクト王国ではなく、アルバ王国としてピクトランドを報告している点に注目したい。『Chronicle of the kings of Alba』には、“And in his 3<sup>rd</sup> year the Northmen plundered Dunkeled, and all Albaniam.” とある。これは 902 年のことで、“Northmen”<sup>56</sup> とは、902 年にダブリンを追放されたヴァイキングであろう。また、“In the following year the Northmen were slain in Straith hErenn.” とあるが、この“Straith hErenn”とは、Strathearn である。同様の報告が、『Annals of Ulster』にもあり、904 年にフォトリッ(ピクト)によってイヴァールの孫のイヴァール(Ímar ua Ímar) (904 年没) と多くの Northmen の殺害が記録されている。これで、一旦、イー・イヴァール王朝が消滅したと考えられる。この報告では、ピクトランドを“Albaniam”と呼んでいる。アルバ王国がコンスタンティン 2 世の治世から始まったと、この年代記は考えている。ピク

<sup>54</sup> ケルズは、ミーズ州にある町である。人口は、5,248 人(2006 年)である。ケルズ修道院は、804 年にヴァイキングのアイオナ侵攻から逃げてきた修道士によって建てられた。

<sup>55</sup> 『Annals of Ulster』によると、“Ruaidrí ua Canannáin, heir designator of Ireland, was killed by the foreigners after he had beleaguered Mide and Brega for six months and had inflicted aslaughter on the foreigners, to the number of two thousand or more.” とある。これは、the Battle of Muine Brócáin と呼ばれた。また、『Chronicon Scotorum』では、“The battle of Muine Brócáin …in which Ruaidrí ua Canannáin fell in the counterattack of the battle and many foreigners fell. Gothfrith fled. Congallach son of Mael Mithig was the victors.” とある。

<sup>56</sup> これは、the Norsemen あるいは the Norse と同じ意味内容で、一般的には Viking を意味している。Viking は、the Northmen (the Norsemen, the Norse), the Foreigners, the Gentiles, Gael-Norse などと呼ばれた。902 年にスコットランドを襲撃したヴァイキングは、853 年にアイルランドを侵攻したアヴラブ(Amlaíb) (875 年没) とイヴァール (Ímar) (873 年没) の子あるいは孫の世代であったと思われる。

ト王国がヴァイキングを消滅させ、ダル・リアダ王国とは違う王国としてピクトランドが確立させた。また、従来のピクト王国とも異なる王国になった。その意味でピクトランドは、新しい王国(独立国)になった。これがアルバ王国と呼ばれた。『Chronicle of the kings of Alba』には、“And in his 6<sup>th</sup> year king Constantine and bishop Cellach, on the Hill of Belief near the royal city of Scone, pledged themselves that the laws and disciplines of the faith, and the laws of churches and gospeis, should be kept in comformity with the Scoti.”とある。これは、ピクトの宗教とアイルランド伝統のキリスト教の融合あるいは調和を図ったことを示しているのであろうか。この宗教教義に関わる問題は、別稿で考察するのが適当であろう。

次に、この資料では、アイルランド王国や周辺国の事情が簡潔に示されている。特に、アルバ王国と関係のあるアイルランド王の死亡記事が報告されている。『Chronicle of the kings of Alba』には、“And in his second year Aed son of Neill died.”とある。このAedは、アイルランド上王アエダ・フィンリアス(Áed FinnliathあるいはFindliath)(在位862年-879年)であった。彼の知られている第3番目の妻は、マエル・ヴィール(Máel Muire)(913年没)で、ピクト王ケニス1世の娘であった。この2人の間にナイル・グウルンダブ(Niall Glúndub)が生まれた。また、アエダの死後、彼女は、フラン・ジンナ上王と再婚し、彼の妻になった。また、そこには、“And in his eight year the most exalted king of the Irish and archbishop fell in Leinster, that is, Cormacc son of Culenna.”とあるが、このクリナンの息子コルマック(Cormacc son of Culenna)(在位902年-908年)とは、アイルランドの司教で、かつ、マンスター王であった。さらに、“And in this time Doneualdus king of the Britons died; and Dunnualdus son of Ede king of Ailech; Flann son of Maelsechnaill and Niall son of Ede who reigned for three years after Flann.”とあるが、この“Doneualdus”は、ストラスクライド王ドムナル1世(Dynfnwall I, Donald I,あるいは, Domnall I)(908年から916年の間に没)を示し、“Dunnualdus son of Ede”は、アエダ<sup>57</sup>の息子ドムナル(Dunnualdus,

<sup>57</sup> Son of Ede は、Áed の息子で、これはアエダ・フィンズリアス(Áed Finnliath)(在位862年-879年)の息子であると考えられる。その息子の Domnall は、915年に死亡した。アエダは、エーレク王であり、かつ、アイルランド上王であったニアル・カイル(Niall Caille)(上王在位833年-846年)の息子であった。彼の父親も北部イー・ニエルに属していた。アエダが上王に就くまでは、アイルランド上王は北部イー・ニエルと南部イー・ニエルから交互に出していた。しかし、ミーズ王(King of Mide)であったマエル・ゼフナル(Máel Sechnaill)(上王在位846年-862年)が上王の位に就いた。彼が王位に就いている間に、南部イー・ニエルのコールマーン族(Clan Cholmáin)に傾いて来た。マエル・ゼフナルは、北部イー・ニエルの台頭に恐れを感じ、アーマー(Armagh)に南部アイルランド軍を送った。アエダは、そこに陣取っていたマエル・ゼフナル軍を攻撃した。さらに、アエダは、ダブリンのノルウェーと連携し、ミーズを襲撃した。ミーズ王ロルカン(Lorcán)は、アヴラブおよびイヴァールと連携し、ブレガ王と戦っ

すなわち Domnall) を示している, と思われる。このアエダとは, ケネル・ネーガン族で, 北部イー・ニエルのメンバーで, かつ, エーレク王 (King of Ailech), かつ, アイルランド上王であった。また, “Flann son of Maelsechnaill and Niall son of Ede” において, “Flann mac of Maelsechnaill” は, アイルランド上王のマエル・ゼフナル (Máel Sechnaill) (在位 846 年-862 年) の息子フラン・ジンナ (Flann Sinna) (在位 879 年-916 年) (847 あるいは 848 年生-916 年没) であり, “Niall son of Ede” とは, アイルランド上王のアエダ・フィンリアス (Áed Finnliath あるいは Findliath) の息子のナイル・グウルンダブ (Niall Glúndub)<sup>58</sup> (在位 916 年-919 年) である。このナイル・グウルンダブもアイルランドの上王であった。

### むすびにかえて

本稿では, 9 世紀から 10 世紀にかけてのスコットランドならびにその周辺国の事情を概観した。特に, この時期には, スカンジナビア人は “Foreigners”, “the Norse”, “the Norsemen” あるいは “the Northmen” と呼ばれ, 後世になって, “Viking” と呼ばれている人々 (民族) がスコットランド, アイルランド, ならびにイングランドの海岸および内陸深くに侵攻したこととその影響を概観した。スコットランドやアイルランドやイングランドの王国では, 時には, ヴァイキングと対立・敵対し, 時には, それと共闘し, その結果, スコットランドには統一王国としてのアルバ王国や, イングランドにも統一王国が成立したことも概観した。また, ヴァイキングとアイルランド王との戦いから, ヴァイキングのアイルランドの統一に果たした意味についても考察した。

今後は, アルバ王国からスコットランド王国の確立を考察する。特に, 10 世紀から 12・13 世紀のスコットランド王国の状況を概観しながら, アルバ王国からスコットランドの統一に向けて, 勃発した事件やその統一に重要な役割を果たした重要人物について概観する。

---

た。彼は, 863 年に, ブレガ王 (king of Brega) を捕らえた。また, 864 年には, 南ブレガ王 (多分, king of Lagore) ゴンフォバル (Conchobar mac Donnchada) (864 年没) とフランの隊員を Clonard の近くで溺死させた。

<sup>58</sup> 彼は, エーレク王であったが, ダル・ナリゼ王 (king of Dál nAraidí) とウルズ王 (king of Ulaid) を敗北させ, 916 年に上王フラン・ジンナの後継者になった。彼は, ノルウェー人 (the Uí Ímair: イヴァール王朝) と戦ったが, それにも拘わらず, ノルウェー人はダブリン要塞を築き定住した。彼は, 彼らと戦うために, イー・ニエル, アーギアラ, およびウルズの支援を受け, レインスターに向かった。しかし, ジトリック・カエフ (Sihtric Cáech) (927 年没) (ノーザンブリア王在位 921 年-927 年) に指揮されたノルウェー人に多くを殺害された。また, 彼は, 919 年 9 月 14 日 Kilmashoge の戦いで戦死した。ジトリック・カエフは, ナイル・グウルンダブ王との激しい戦いに勝利したが, 920 年あるいは 921 年にヨークに向かった。多分, イヴァールの孫ラグナル (Ragnall) (ヨーク王在位 918 年-921 年) の死後, ヨーク王になるためであったろう。

### 参考文献

- マックス・ウェーバー 著(大塚 久雄 訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
- リンダー・コリー 著(川北 稔 監訳)『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会 2000年9月
- スマウト, T. C. (木村 正俊 監訳)『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
- アダム・スミス 著(大内 兵衛・松川 七郎 共訳)『諸国民の富』(四) 岩波文庫 1992年4月
- ジェフ・デランティ 著(山之内 靖・伊藤 茂 共訳)『コミュニティ』NNT 出版 2007年4月
- プラトン 著(藤沢 令夫 訳)『国家(上),(下)』岩波文庫 2009年9月
- プラトン 著(森 進一・池田 美穂・加来 彰俊 共訳)『法律(上),(下)』岩波文庫 1993年2月
- Plato 著(Desmond Lee 訳), *Timaeus and Critias*, Penguin Classics 1976年
- ベドロ・マルテル 著(清水 憲男 訳)『新世界とウマニスタ』岩波書店 1993年3月
- A. L. モートン 著(鈴木 亮・荒川 邦彦・浜林 政夫 訳)『イングランド人民の歴史』未来社 1976
- David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
- ジョン・ロック 著(鶴飼 信成 訳)『市民政府論』岩波文庫 1971年1月
- ジョン・ロック 著(加藤 節 訳)『統治二論』岩波文庫 2010年12月
- (くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)